

Title	拒否に対する感受性がストレスコーピングの選択に及ぼす影響
Sub Title	The influence of rejection sensitivity on the choice of stress coping
Author	小川, 万理子(Ogawa, Mariko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.105- 112
JaLC DOI	
Abstract	The purposes of this study were to investigate (a) the influence of rejection sensitivity on the choice of coping strategies, and (b) the influences of rejection sensitivity and coping strategies on self-reported psychological and physical health. Two hundred and thirty-two undergraduates were asked to complete the questionnaire on rejections sensitivity. Coping strategies in response to inter personal stressors, and health symptoms. Results showed that rejection-sensitive undergraduates were likely to choose "giving up", and "evading one's responsibility" strategies, but were not likely to choose "positive inter pretation", "distractive recreation", or "plan drafting "strategies. Among these strategies, giving up "and plandrafting", were related to more distress and "positive interpretation" was related to less distress. These results suggest that to use "positive interpretation" strategy and not to use "giving up", strategy in response to interpersonal stressors are effective to reduce stress responses for rejection sensitive people.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-0000060-0105

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

拒否に対する感受性がストレスコーピングの選択に及ぼす影響

The Influence of Rejection Sensitivity on the Choice of Stress Coping

小川 万理子*
Mariko Ogawa

The purposes of this study were to investigate (a) the influence of rejection sensitivity on the choice of coping strategies, and (b) the influences of rejection sensitivity and coping strategies on self-reported psychological and physical health. Two hundred and thirty-two undergraduates were asked to complete the questionnaire on rejections sensitivity, coping strategies in response to interpersonal stressors, and health symptoms. Results showed that rejection-sensitive undergraduates were likely to choose “giving up” and “evading one’s responsibility” strategies, but were not likely to choose “positive interpretation”, “distractive recreation”, or “plan drafting” strategies. Among these strategies, “giving up” and “plan drafting” were related to more distress and “positive interpretation” was related to less distress. These results suggest that to use “positive interpretation” strategy and not to use “giving up” strategy in response to interpersonal stressors are effective to reduce stress responses for rejection-sensitive people.

問 題

これまでのストレス研究によって、日常経験するイベントが我々の健康状態を左右することが明らかにされてきた。様々なイベントの中でも、対人関係にまつわるストレスフルなイベント（対人ストレスラー；口論など）は健康状態にとりわけ大きな悪影響を及ぼすことが報告されている（Bolger, DeLongis, Kessler, & Schilling, 1989; 高比良, 1998）。しかしながら、どれほど対人ストレスラーを経験するか、そしてストレス反応（健康度の低下）を呈するかには個人差がある。本研究では、拒否に対する感受性 (rejection sensitivity; RS) の高い者がなぜ高いストレス反応性を示すのかについて、ストレスコーピングとの関連から検討する。

RSとは、重要他者から拒否されると不安を伴って予期し、また拒否をすぐに知覚して過剰反応しやすい傾性をさす (Downey & Feldman, 1996)。Downey & Feldman (1996, study 1) はこれら3つの特

本研究の一部は、日本心理学会第69回大会において発表した。また本研究は平成16年度大学院高度化推進研究費助成金の助成を受けた。

* 慶應大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程（臨床社会心理学）

徴のうち、拒否についての予期とそれに伴う不安・懸念がRSの中核であると論じ、両者を測定する尺度(Rejection Sensitivity Questionnaire; RSQ)を開発した。すなわち、両親・友人・恋人といった重要他者から拒否されると予期し、なおかつそれについて不安を強く感じやすい者がRSの高い者(HRS)とみなされる。

RSQを用いた研究により、RSが日々の対人関係での経験に影響することが明らかにされてきた。まず、RSと対人ストレスの経験について、例えばDowney, Freitas, Michaelis, & Khouri(1998)は、RSの高い大学生ほど1年の調査期間の間に恋人と破局した者の割合の高いことを明らかにした。またPurdie & Downey(2000)は、RSの高い女子生徒ほど恋人間でより暴力を伴う葛藤を経験しやすいことを報告している。またこのような対人ストレスが健康状態に及ぼす影響については、例えばAyduk, Downey, & Kim(2001)は女子学生を対象に検討を行っている。ここでは恋人に別れを切り出された場合が高ストレス、自分が、または互いに切り出すか、あるいは関係が継続している場合が低ストレスとみなされた。結果、HRSほどストレスに左右されやすく、高ストレスを経験することによって抑うつを増加させていた。同様の傾向は、我が国の大学生についても明らかにされている。これまでの研究により、HRSほど対人ストレスを経験しやすく(小川, 2003)、なおかつこのような経験によって健康状態がより阻害されやすいこと(小川, 2004a)が報告されている。

このHRSが示すストレス反応性の高さには、(ストレス)コーピングの問題が関与していると考えられる。コーピングとは、Lazarus & Folkman(1984)によると、「有害、あるいは個人の資源を超えていると評価された外的・内的要求に対応するための認知・行動的努力」のことをさす。Bolger & Zuckerman(1995)によると、パーソナリティがコーピングとストレス反応に影響を及ぼすにあたっては、次の経路をたどると想定しうる。まず、パーソナリティがコーピング方略の選択に影響を及ぼし、結果としてストレス反応の程度に違いが現れるという経路(differential coping-choice model)が仮定される。一方で、パーソナリティはコーピング方略の選択には影響しないが、選択された方略のストレス低減効果に影響するという経路(differential coping-effectiveness model)も仮定される。さらに、パーソナリティがコーピング方略の選択とストレス低減効果の双方に影響するということ(differential coping choice-effectiveness model)も仮定しうる。Bolgerらは神経症傾向について、怒り反応についてはdifferential coping-choice modelが適合することを見出した。怒り反応に関わるものについては、神経症傾向の高い者ほど対人葛藤に対して自己コントロール方略(例:自分の気持ちを外に出さないようにした)と対決方略(例:その問題に関わった人に考えを変えてもらえるようにした)を用いる傾向にあったが、コーピングの効果に神経症傾向の程度による違いは見られなかった。そして抑うつ反応については、自己コントロール方略と逃避・回避方略(例:その状況が終わるように願った)にはdifferential coping choice-effectiveness modelが、対決方略にはdifferential coping-choice modelが適合することを報告した。抑うつ反応に関わるものについては、神経症傾向の高い者ほど対人葛藤に対して自己コントロール方略、逃避・回避方略、対決方略共によく用いる傾向にあった。このうち自己コントロール方略は神経症傾向が高い者の抑うつを増加させる傾向にあったが、神経症傾向の低い者に対しては抑うつ低減効果が見られた。逃避・回避方略については、神経症傾向が高い者の抑うつに影響しなかったが、神経症傾向の低い者の抑うつを増加させていた。そして対決方略の抑うつに及ぼす影響には、神経症傾向の程度による違いはなかったという。このBolger & Zuckerman(1995)以後の研究として、例えばHahn(2000)は、情緒的サポート希求方略(例:自分の気持ちを誰かに話す)の選択に対人的統制の所在

(interpersonal locus of control) が影響することが怒りと抑うつ程度の違いに結びつくこと (differential coping-choice model), 統合方略 (例: 問題解決のために他者と情報交換をする) の抑うつ低減効果に統制の所在による違いが見られたこと (differential coping-effectiveness model), そして身体的健康に関しては, 統制の所在と健康との関連についてコーピングによって明らかにならなかったこと等を報告した。そして Conner-Smith & Compas (2002) は対人志向性格 (sociotropy)・対人ストレッサーへのコーピング方略・抑うつ間の関連について, コーピング方略の媒介効果は弱かったものの, コーピング方略の選択頻度の程度によって対人志向性格と抑うつとの関連の強さが異なることを示している。

上記のように, これまでに様々な傾性について, それがコーピング方略とストレス反応に影響することが示唆されてきている。神経症傾向と RS との間には中程度の相関があり, RS が神経症傾向のファセットだと解釈しうることが指摘されている (Downey & Feldman, 1996, study 3)。また対人志向性格・対人的統制の所在は, RS と同様に対人領域に限定された傾性である。以上のことから, 未だ直接的な検討のない RS が高いストレス反応性に至るまでのプロセスについて, コーピング方略に着目することによって理解が深まり, HRS のストレス低減について何らかの示唆が得られると期待される。そこで本研究では, まず RS の程度によって選択されるコーピング方略が異なるのかを検討する。そして RS とコーピング方略が健康状態とどう関わるのか, より具体的には, (1) RS と関連のあるコーピング方略が健康状態にどう結びつくのか, (2) RS の程度の違いによってコーピングの効果異なるのかを検討することを目的とする。

方 法

手続きと調査対象者

首都圏の 4 年制大学および短期大学の講義時間において, 調査への参加が強制ではない旨を説明した後無記名式の質問紙調査を実施した。調査への参加に同意し, かつ回答漏れ・回答ミスのなかった 232 名 (男性 74 名, 女性 158 名) を分析対象とした。平均年齢は 20.1 歳 ($SD=1.0$) であった。

測 度

1. RS の測定

日本語版拒否に対する感受性測定尺度 (JRSQ; 本多・桜井, 2000) を用いた。これは Downey & Feldman (1996) の RSQ に日本人にとって馴染みのない項目 (場面) に修正を加えた上で, 翻訳がなされた尺度である。18 の対人依頼場面 (例: 「友人を真剣に怒らせた後でその友人に話し掛ける」) から構成されており, 各場面において拒否に対する「心配」・「予期」が測定される。「心配」とは, 相手 (両親・友人・恋人など) から受容/拒否されることについての不安・懸念をさす。「全く心配でない (1 点)」から「非常に心配である (6 点)」までの 6 件法で回答を求めた。「予期 (逆転項目)」とは相手に受容/拒否される可能性をさす。「必ず断られる (1 点)」から「必ず受け入れられる (6 点)」までの 6 件法で回答を求めた。当尺度の項目得点は「心配」と「予期」を掛け合わせることで算出した (Downey & Feldman, 1996; 本多・桜井, 2000)。なお, 本研究では場面をより明確に提示するため, 質問項目文の主語の位置を変える等の変更を一部に施した上で使用した。項目を一部変更したために本研究のデータについて主成分分析を行ったところ, 第 1 主成分への負荷量が, .35 以上となったのは 16 項目であった。そこで 16 項目分の平均項目得点を, 以下の分析で使用することとした。

2. コーピングの測定

Tri-axial Coping Scale-24 (TAC-24; 神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995) を用いた。これは「肯定的解釈」(例:「悪いことばかりではないと、楽観的に考える」)、「カタルシス」(例:「誰かに話を聞いてもらい、気を静めようとする」)、「回避的思考」(例:「嫌なことを頭に浮かべないようにする」)、「気晴らし」(例:「スポーツや旅行などを楽しむ」)、「計画立案」(例:「原因を検討し、どのようにしていくべきか考える」)、「情報収集」(例:「既に経験した人から話を聞いて参考にする」)、「放棄・諦め」(例:「自分では手におえないと考え、放棄する」)、「責任転嫁」(例:「自分は悪くないと言いのがれする」) というコーピング方略、各 3 項目から構成された尺度である。本研究では、岡安 (1992) による対人関係ストレス状況の説明文を教示の冒頭に提示し、家族・友人・恋人との間でこのような状況を経験した際に普段選択している方略について、「そのようにしたこと (考えたこと) はこれまでにない。今後も決してないだろう (1 点)」から「いつもそうしてきた (考えてきた)。今後もそうするだろう (5 点)」までの 5 件法で回答を求めた。8 つの方略ごとの合計得点を算出した。

3. ストレス反応の測定

大学生用ストレス自己評定尺度改訂版 (尾関, 1993) のうち、ストレス反応尺度を用いた。これは「情動的反応」(抑鬱・不安・怒り) 15 項目、「認知・行動的反応」(情緒の混乱・引きこもり) 10 項目、「身体的反応」(自律神経系の活動亢進・身体的疲労感) 10 項目から構成された尺度である。最近 1 週間に自覚した心身の健康状態について、「あてはまらない (0 点)」から「非常にあてはまる (3 点)」までの 4 件法で回答を求めた。「情動的反応」「認知・行動的反応」「身体的反応」と、これらすべてを合計した「総ストレス反応」得点を算出した。

結 果

基本統計量

各変数の平均値・標準偏差を算出し、Table 1 に示した。8 つのコーピング方略のうち、「カタルシス」

Table 1 各変数の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差
JRSQ		
RS	11.37	3.75
TAC-24		
肯定的解釈	10.16	2.99
カタルシス	10.76	3.27
回避的思考	7.54	2.89
気晴らし	8.59	2.97
計画立案	9.53	2.97
情報収集	8.63	2.89
放棄・諦め	6.13	2.47
責任転嫁	5.08	2.09
ストレス反応尺度		
情動的反応	11.81	10.32
認知・行動的反応	5.22	5.62
身体的反応	4.78	5.93
総ストレス反応	21.81	19.21

が比較的選択されやすく、逆に「責任転嫁」が選択されにくいことが示された。

拒否に対する感受性がコーピング方略の選択に及ぼす影響

2変数間の相関係数を算出し、Table 2 に示した。RS とコーピング方略との関連に着目すると、「RS」と「放棄・諦め」および「責任転嫁」との間に有意な正の相関が示された。また「RS」と「肯定的解釈」「気晴らし」「計画立案」との間に有意な負の相関が示された。

拒否に対する感受性・コーピング方略が健康状態に及ぼす影響

RS とコーピング方略が健康状態に及ぼす影響を検討するため、ストレス反応尺度の各変数を従属変数とする階層的重回帰分析を行った。重回帰式の第1ステップには、RS とコーピング方略を投入した。そしてコーピング方略の効果がRS の程度によって異なるかを検討するため、第2ステップにはRS とコーピング方略の交互作用を投入した。なお、交互作用項の投入に伴う多重共線性の問題を避けるため、RS とコーピング方略を平均偏差得点に改めた上で分析を行った (Aiken & West, 1991; Cohen, Cohen, West, & Aiken, 2003 を参照)。その結果、第1ステップの決定係数はすべてのストレス反応において有意となった。一方、第1ステップから第2ステップへの決定係数の増分はすべてのストレス反応において有意にはならなかった (「情動的反応」 $\Delta R^2=.03$; 「認知・行動的反応」 $\Delta R^2=.04$; 「身体的反応」 ΔR^2

Table 2 2変数間の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1. RS	—											
2. 肯定的解釈	-.36***	—										
3. カタルシス	-.10	.11 [†]	—									
4. 回避的思考	-.10	.35***	.05	—								
5. 気晴らし	-.23***	.37***	.32***	.30***	—							
6. 計画立案	-.17**	.41***	-.09	.00	.17**	—						
7. 情報収集	-.07	.19**	.40***	.12 [†]	.29***	.38***	—					
8. 放棄・諦め	.15*	.05	.05	.34***	.11 [†]	-.25***	-.02	—				
9. 責任転嫁	.16*	.08	.06	.22***	.04	-.08	.08	.55***	—			
10. 情動的反応	.30***	-.33***	.02	-.08	-.11 [†]	.02	.06	.08	.03	—		
11. 認知・行動的反応	.31***	-.23***	-.04	-.02	-.03	-.09	-.03	.21**	.14*	.66***	—	
12. 身体的反応	.22***	-.23***	-.02	-.06	-.09	-.07	-.01	.17**	.04	.62***	.64***	—
13. 総ストレス反応	.32***	-.31***	-.01	-.07	-.10	-.03	.02	.16*	.07	.92***	.85***	.83***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

Table 3 RS・コーピング方略が健康状態に及ぼす影響に関する重回帰分析結果

	情動的反応	認知・行動的反応	身体的反応	総ストレス反応
RS	.20**	.23**	.13 [†]	.21**
肯定的解釈	-.38***	-.21**	-.21**	-.33***
カタルシス	.10	-.02	.02	.05
回避的思考	.03	-.02	-.03	.00
気晴らし	-.03	.08	-.02	.00
計画立案	.25**	.07	.10	.18*
情報収集	.02	-.01	.01	.01
放棄・諦め	.14 [†]	.18*	.24**	.20**
責任転嫁	-.04	.03	-.08	-.04
adj. R ²	.17***	.12***	.08**	.16***

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, [†] $p < .10$

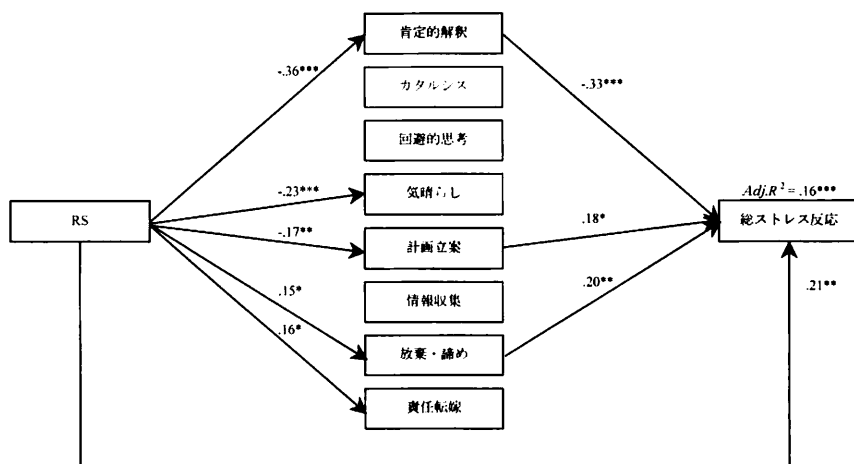


Figure 1 「総ストレス反応」についてのパス図

注) 有意であった係数を図示。

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

=.05; 「総ストレス反応」 $\Delta R^2 = .04$, すべて ns.)。有意となった第 1 ステップの結果を、Table 3 に示した。この第 1 ステップにおける標準偏回帰係数 (β) については、まず「情動的反応」において、「RS」と「計画立案」からの有意な正の β と、「肯定的解釈」からの有意な負の β が示された。「認知・行動的反応」においては、「RS」と「放棄・諦め」からの有意な正の β と、「肯定的解釈」からの有意な負の β が示された。「身体的反応」においては、「放棄・諦め」からの有意な正の β と、「肯定的解釈」からの有意な負の β が示された。「総ストレス反応」においては、「RS」「計画立案」「放棄・諦め」からの有意な正の β が、「肯定的解釈」からの有意な負の β が示された。「総ストレス反応」については、以上の分析から得られた結果を Figure 1 のパス図にまとめて示した。

考 察

本研究の目的は、RS がコーピング方略の選択に及ぼす影響と、RS とコーピング方略が健康状態に及ぼす影響を検討することであった。本研究の結果から、まず、RS がコーピング方略の選択に及ぼす影響については、HRS ほど「放棄・諦め」と「責任転嫁」方略を選択する傾向にあることが明らかとなった。そして、これとは逆に、HRS ほど「肯定的解釈」「気晴らし」「計画立案」方略を選択しない傾向にあることが示された。HRS は対人ストレスを経験した際、そのストレス状況が悪化していく、あるいは新たなストレスが生起すると予想しやすいのかもしれない。そのため、状況を肯定的に捉えなおしたり問題の解決に向けて計画を立てたりすることをせず、解決を諦めている可能性がある。しかしながら RS とストレス状況の展開に関する予期については検討がなされていないため推論の域を出ておらず、この可能性については今後の検討課題として残されている。一方、ストレスに関する先行研究からは、神村ら (1995) は TAC-24 の二次因子分析を行い、HRS が用いやすい「放棄・諦め」と「責任転嫁」方略は、ともに問題回避方略という背景因子から説明されることを見出している。そして認知的評価 (個人と環境との相互作用がどの程度ストレスフルであるかを決定する評価的過程; Lazarus & Folkman, 1984) について場面想定法による調査を行った小川 (2004b) によると、HRS ほど対人ストレッ

サーをより脅威的でコントロール不可能だと評価する。脅威性の評価は Lazarus & Folkman (1984) の提唱する一次的評価に、コントロール可能性の評価は二次的评价に含まれる。そして一次的評価 (Lengua, Sandler, West, Wolchik, & Curran, 1999)・二次的评价 (嶋田・坂野・上里, 1995) とともに、回避的なコーピング方略の選択と関連することが知られている。これらのことから、RS と問題を回避するようなコーピングとの関連に、認知的評価が影響していたと考えられる。

次に、健康状態への影響については、HRS が頻繁に用いる方略のうち、「放棄・諦め」方略の「情動的反応」への影響が有意傾向にとどまったことを除き、他の全てのストレス反応を増大させることが示された。一方で HRS があまり用いない方略のうち、「計画立案」方略が「情動的反応」と「総ストレス反応」を増大させていたが、逆に「肯定的解釈」方略は全てのストレス反応を低減させていた。各重回帰式の β から、健康状態に対する「肯定的解釈」方略の肯定的な影響力と「放棄・諦め」方略の否定的な影響力が比較的大きいことが示されたが、この結果は TAC-24 の項目表現を中高生用に改めて使用した青山・濱口 (2001) の報告と一致していた。加えてコーピング方略の健康状態に及ぼす影響については、RS の程度による違いは示されなかった。これらの結果から、対人関係上の問題の解決を放棄するような方略をあまり用いず、逆にストレス状況の中に肯定的な面を見出そうとする方略を用いるようにすることによって、HRS のストレス反応が低減しうると示唆された。

最後に、今後の課題として、まずストレスラーを分析に含めること、縦断的調査を行って因果関係を明確化することが挙げられる。また本研究では、普段使用しているコーピングについて検討した。コーピングの検討には、最近経験した特定のストレスラーに対して実際に用いたコーピングを測定するという方法もある (e.g., O'Brien & DeLongis, 1996) が、このコーピングについて検討した場合、本研究と同様の結果が得られるかの確認も必要である。さらに、橋本 (2003) は近年、対人ストレスラーを過剰 (不快な対人相互作用の存在: 暴力など) と過少 (快適な対人相互作用の不足: 無視など) の 2 つに分類しうることについて論じている。このような対人ストレスラーの種類の違いによって RS がコーピングの選択に及ぼす影響や、これらが健康状態に及ぼす影響が異なるのかも今後の検討課題だと考えられる。加えて、本研究ではコーピング方略を扱ったが、ストレス低減効果を持つものとしてはソーシャルサポートも挙げられる (浦, 1992 を参照)。HRS にとってサポートが有効に機能するのかの検討も今後必要となろう。これらの問題を検討することにより、RS の対人ストレス過程に対する否定的な効果を緩衝する要因がより明確に同定されると考えられる。

引用文献

- Aiken, L. S., & West, S. G. 1991 *Multiple regression: Testing and interpreting interactions*. Newbury Park, CA: Sage.
- 青山香菜子・濱口佳和 2001 ストレス対処方略の相補的影響—学校適応感・ストレス反応への影響の比較— 千葉大学教育学部研究紀要 (1: 教育科学編), 49, 19-28.
- Ayduk, O., Downey, G., & Kim, M. 2001 Rejection sensitivity and depressive symptoms in women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27, 868-877.
- Bolger, N., DeLongis, A., Kessler, R. C., & Schilling, E. 1989 Effects of daily stress on negative mood. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 808-818.
- Bolger N., & Zuckerman, A. 1995 A framework for studying personality in the stress process. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 890-902.
- Cohen, J., Cohen, P., West, S. G., & Aiken, L. S. 2003 *Applied multiple regression/correlation analysis for the*

- behavioral sciences. 3rd ed.* Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.
- Conner-Smith, J. K., & Compas, B. E. 2002 Vulnerability to social stress: Coping as a mediator or moderator of sociotropy and symptoms of anxiety and depression. *Cognitive Therapy and Research*, 26, 39-55.
- Downey, G., & Feldman, S. 1996 Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 1327-1343.
- Downey, G., Freitas, A. L., Michaelis, B., & Khouri, H. 1998 The self-fulfilling prophecy in close relationships: Rejection sensitivity and rejection by romantic partners. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 545-560.
- Hahn, S. E. 2000 The effects of locus of control on daily exposure, coping and reactivity to work interpersonal stressors: A diary study. *Personality and Individual Differences*, 29, 729-748.
- 橋本 剛 2003 対人ストレスの定義と種類—レビューと仮説生成的研究による再検討— 人文論集 (静岡大学人文文学部), 54, 21-57.
- 本多潤子・桜井茂男 2000 日本語版拒否に対する感受性測定尺度の作成 筑波大学心理学研究, 22, 175-182.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1995 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, 33, 41-47.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 1984 *Stress, appraisal, and coping*. New York: Springer. 本明 寛・春木 豊・織田正美 (監訳) 1991 ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究— 実務教育出版
- Lengua, L. J., Sandler, I. N., West, S. G., Wolchik, S. A., & Curran, P. J. 1999 Emotionality and self-regulation, threat appraisal, and coping in children of divorce. *Development and Psychopathology*, 11, 15-37.
- O'Brien, T. B., & DeLongis, A. 1996 The interactional context of problem-, emotion-, and relationship-focused coping: The role of the big five personality factors. *Journal of Personality*, 64, 775-813.
- 小川万理子 2003 拒否に対する感受性とライフイベント, ストレス反応との関連 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 1010.
- 小川万理子 2004a 拒否に対する感受性とライフイベント, ストレス反応との関連 (2) 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 955.
- 小川万理子 2004b 拒否に対する感受性と対人場面についての認知的評価および他者の感情状態の推測との関連 「メンタルモデルの利用と形成における外的・内的情報の統合」平成 15 年度未来開拓学術研究推進事業研究プロジェクト (JSPS-RFTF99P01041) 受託研究費 0116 (情報学研究科) 研究成果報告集, 31-37.
- 尾関友佳子 1993 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂—トランスアクションナルな分析に向けて— 久留米大学大学院比較文化研究科年報, 1, 95-114.
- 岡安孝弘 1992 大学生のストレスに影響を及ぼす性格特性とストレス状況との相互作用 健康心理学研究, 5, 12-23.
- Purdie, V., & Downey, G. 2000 Rejection sensitivity and adolescent girls' vulnerability to relationship-centered difficulties. *Child Maltreatment*, 5, 338-349.
- 嶋田洋徳・坂野雄二・上里一朗 1995 学校ストレスモデル構築の試み ヒューマンサイエンス リサーチ (早稲田大学大学院人間科学研究科), 4, 53-68.
- 高比良美詠子 1998 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討 社会心理学研究, 14, 12-24.
- 浦 光博 1992 支えあう人と人—ソーシャル・サポートの社会心理学— サイエンス社